

伏見稲荷神社の奥の院は、稲荷山にいたる広大な宗教的空間になっており、「お塚」と呼ばれる一種独特の「稲荷塚」が1万基ほどあるといわれているが、これがまさに圧巻である。









伏見稲荷神社の奥の院である稲荷山を含む一体は、異様な雰囲気のある空間である。その空間は、日常的な空間ではなく、その異様な雰囲気にひたっていると、どこかに異界に通じる通路（穴）が、目には見えないけれどあるような気がしてくる。超能力を有した超人や仙人の導きがあれば、私たちも仙人の世界というか異界に行けるような気分になってくる。誰か超人的な人がやってきて仙人の世界に連れて行って欲しくないかなあ。そんな期待も生じてくるのである。庶民のそういう気分からであろう。そういう庶民の気持ちから、「吉野でおうた娘」という伝説が生まれた。「日本の伝説（下）」（松谷みよ子、昭和50年7月、講談社）に掲載されているので、是非、読んでほしい。あらすじは次のとおりである。

京都で手びろく商いをしているところの「はる」という娘が、ある日、近所の人と伏見稲荷山にワラビを摘みにいく。ふと気がつくとき超人的な雰囲気の坊さんが「おいで」と言っている。近づくと、気がついたときにはもう吉野の山の中はこぎれいな庵（いおり）に連れて行かれていた。そこで生活をしているうちに、「はる」は超能力を身につける。「はる」はそれに気がついていないようだが、後日、その超能力によってあらかじめ京都の大火災を察知し、実家の危機を助ける。その伝説では、仙人の話というか天狗の話というか不思議な話がいろいろと語られ、話の最後で、「あの老人は天狗とか仙人のたぐいだったのだろうか」と言っている。この伝説の本質的なところは伏見稲荷山における異界に通じる通路の話である。これは庶民の異界への憧れ以外の何ものでもない。異界への憧れ、それが魔界・伏見稲荷山だ。